

第六章 太平洋戦争とサツマイモ

◆ ガソリンいも

一九三一（昭和六）年に満州事変が起こった。現代の戦争でなくてはならない物の一つに石油がある。その資源がもとも少ないわが国が頼りにしたのは、石炭の液化事業と、ガソリン消費量を節約するために、それに混入する燃料用無水アルコールの増産だった。

前者はドイツがすでに成功していて、実用品になっていた。だからわが国でも、実用化が可能と思われていた。だが、ネックが次々に現われ、どうやっても成功しなかった。

後者はサツマイモを原料としておこなうことになった。アルコールはコメかムギから造るのが楽だが、わが国ではそのコメの自給さえできていなかったからである。

それで液体燃料製造用に使われたのがサツマイモだった。だが、当時のその畑一反当たり
の収量は低く、良くても三百貫（約一・一トン）前後だった。

国はそれを少なくとも二倍以上にしたかった。だから、それ向きの多収イモの育成に力を入れた。同時に、全国各地でのサツマイモ多収競争大会を開かせた。それは燃料用で、味の良し悪しは問題外だったから成果はすぐ出た。

関東では千葉県で「沖縄百号」を使い、一反で一貫以上もの収穫をする農家が次々に現われた。さらに茨城県では、「沖縄百号」以上の多収競争が可能な「茨城一号」が育成され、国をほっとさせた。

両者の味は早掘りすれば、まあまあだった。だが、それを避け、畑にできるだけ長く置いておくと巨大なイモになった。その代わり味はひどいものになった。

それはそれとして、太平洋戦争が始まると液体燃料不足とは別の食糧問題も厳しくなった。戦前のわが国は、主食のコメの自給もできていなかった。その不足分を植民地にしていた朝鮮と台湾から移入していただけではない。東南アジアのタイなどから、外国米も輸入していた。その移入米も、外米も、戦況の悪化から入ってこなくなった。

困った国は非農家に配給しなければならぬコメの不足分を、サツマイモなどで代用することにした。そのイモが甘くておいしいものだったらまだよかったはずである。だが、農家から集めたそれは、液体燃料用だった「沖繩百号」や、「茨城一号」と同じものだった。だから消費者は困った。嘆いた。

ちなみに国は一九三七（昭和十二）年から一九四〇（昭和十五）年にかけて、全国のサツマイモ大産地に国営アルコール工場を建設した。それは九州では熊本県大津町、鹿児島県出水町、宮崎県高鍋町、長崎県島原町、佐賀県相知町、鹿児島県鹿屋町、宮崎県小林町の七か所。四国では愛媛県宇和郡旭村近永（広見町）の一か所。そして関東では千葉県千葉市と茨城県石岡町の二か所だった。

それらの工場の操業は、年中無休だった。そのため原料イモは、なまなまきりイモがある時期はそれを使い、それが無くなると生切干なまきりを使った。だから農家は生イモだけでなく、それをスライスし、天日で干して作る「生切干」も供出させられていた。

◆ 西日本の「護国薯」
ごこくいも

戦時下のわが国が、燃料用無水アルコール製造のサツマイモにどれほど期待していたかがわかるものに、その名も物々しい「護国薯」があった。それは一九三八（昭和十三）年、三重県立農事試験場が育成したもので、日照りに強かった。それで特に西日本で盛んに作られた。

消費者のそれについての思い出が、二〇一八（平成三十）年二月十四日の「毎日新聞」投書欄に載った。

それは少年期には愛知県にいて、今は埼玉県入間市在住という松井臣氏のものでこうあった。

「私はふかしイモが好きだ。あつあつのところに粗塩をパラパラとかけて食べる。そしてその都度、あの頃、こんなになんか甘くてうまいイモがあったらなあ・・・と思う。

一月二十八日の、くらしなび面で『護国イモ』の記事を読み、一気に七十余年前のことがよみがえった。

その記事にあつたように、護国イモは肥料をやらんでもよく取れるイモだった。「毎日こればかり食べていたので、おいしいという記憶はない」「護国イモなんて、そう知る人もない」と思っていた。このイモが再びこぞって食べられるような時代が来ないことを願ってやまない」と。

関東では「護国藩」についての情報は少ない。それだけに、わたしにとっては、この松井さんの投書記事がとてもありがたいものになっている。

◆ いも電車

味のことはともかくとして、戦争中の非農家に対する国の食糧配給制度は維持されていた。それが終戦直後から二、三年にかけての大混乱期になると、長期の遅配と、あげくの果て欠配が当たり前になった。

それで困った非農家の人たちは餓死しないために、近郊の農村にどつとサツマイモの買い出しに出た。本当はコメが欲しかったはずだが、それは普通の家庭では手に入らなかった。安い公定価格よりは、はるかに高いヤミ値でなんとか買えたのはサツマイモぐらいのもだった。それもその品種となると、「沖縄百号」か「茨城一号」だった。

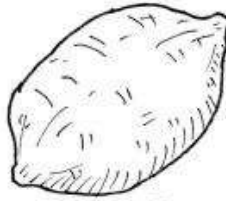
川越地方はもともと有名なサツマイモ産地だったのと、第一次世界大戦が始まった一九一四年に、池袋と川越間の鉄道「東上線」が開通していたところだった。だから東京方面から、それに乗って川越地方にくる人びとが激増した。同線が「いも電車」と言われたのは、そのためだった。

×



・収量少ない
紅赤・作りにくい

○



沖縄100号



茨城1号

・収量が多い
・作りやすい



アルコール工場へ

戦争中

ガソリンに
混ぜるアルコール
を増産せよ!



日本の軍隊



ガマンして
食べなさい……

また、まずい
オイモか……

食糧不足